



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 外国語大学の語学教育が抱える課題と語学教育改革の展望                                                  |
| Author(s)    | 金子, 百合子                                                                     |
| Citation     | 国際語としてのロシア語 : 国際統一基準による言語能力レベル評価システム構築の現状と将来的課題. 2019, p. 35-50             |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/85109">https://doi.org/10.18910/85109</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 外国語大学の語学教育が抱える課題と 語学教育改革の展望

金子 百合子  
(神戸市外国語大学)

## 1. はじめに

本学は外国語学部だけの単科大学である。学部は専攻する語学と地域を中心に学ぶ4学科（英米学科、ロシア学科、中国学科、イスパニア学科）と、専攻語学としては英語を学びながら国家間・地域間の関係について学ぶ国際関係学科の計5学科で構成されており、さらに英米学科は夜間に開講される第2部英米学科を有する<sup>(1)</sup>。専攻語学の学習は4年間続くが、それと並行して高年次になると、すなわち3-4年次（Ⅲ-Ⅳ階梯）の2年間、学生は各々の学術的関心に合致する専門コースを選択し、卒業論文執筆に向けたゼミナールに所属することになる。そのようなコースには「語学文学コース」「法経商コース」「総合文化コース」「国際コミュニケーション」の4コースがあり、語学文学コース以外は学科の垣根をまたいで自由に選択できる。このように外国語の学習とさらにそこから外国語を通して専門領域の学術的探求へと進む本学の語学教育は、「外国語」が終始揺らぐことの無い大学での学びの根幹に位置づけられているという点では単純明快でありながら、そこには学ぶ対象としての「外国語」、学ぶ手段としての「外国語」、外国語大学に相応しい「外国語」といった、外国語大学に特有な多面的性格を併せもつ。

本稿では、昨年秋に立ち上がった、語学教育改革に向けたワーキンググループでの議論を踏まえて、本学が抱える語学教育における課題を紹介し、その中でもロシア語の外部試験の利用可能性の模索とその際に直面する問題点を検討することを目的とする。

## 2. 語学教育改革の背景——外国語大学の語学教育が抱える課題

外国語を軸として、専攻語学（学科）と学術的な専門領域（学科横断的コース）と「二つの専門」を修めるカリキュラムを持つ本学では、これまでも語学教育をめぐっていくつかの課題が指摘されてきた。

- a. クラスサイズの大きさ
- b. 教科間の連携の弱さ
- c. 教科の区分（名称）と諸言語技能区分との相関性およびバランス
- d. 各階梯間の橋渡し

---

(1) 神戸市外国語大学・カリキュラム概要 <http://www.kobe-cufs.ac.jp/department/curriculum/>  
(2019/03/03 閲覧)

- e. 学習者の修得能力を検証する仕組み
- f. 外国語大学で修得すべき語学能力とは何か
- g. 専攻語学と専門の学問領域（コース）の間の有機的相関性

順番にコメントしていこう。まず、a. クラスサイズの大きさであるが、文法や講読の授業は40人程度、会話や作文といったコミュニケーション的な実践的運用能力を高める授業ではその半分の20人程度になる。20人クラスでは、個々の学生に割り当てられる時間は少なく、十分なアウトプットの訓練を積めない。b. 科目間の連携と体系化がとりわけ外国語教育において積極的に図られなければならないのは、言語というものの性格にある。外国語の学習が便宜的に多技能多領域に分かれながら、言語の実態は、それらが有機的に結びついた総体であり、「外国語の運用能力」と言う場合も総合的な能力を問題にする。語学教育を専門にする本学でも、外国語の多様な技能・領域をカバーするようにそれぞれの語学教育に関する科目が分かれているのだが、分化された言語の諸技能が学習者にあって有機的につながり、言語の総体的な運用能力として定着しているかどうかの検証がなされるべきというものである。実際には、複数の教員が共通の教科書を用いてリレー式に進めるI階梯を除くと、各科目については教科書、学習項目、学習レベル等も担当教員の判断と裁量に任せられており、連携が十分に取れていないのが実態である。

c. は先述のb. の課題と大きく関連する。先に、言語の諸領域を異なる教科として分化させていると述べたが、教科につけられる科目名称「文法」「講読」「会話」「作文」が、例えば文部科学省が外国語教育の技能区分に用いる4技能5領域の区分と一致するわけではない<sup>(2)</sup>。各教科が後者の区分においてどのような位置を占め、どの技能・領域の役割を担うのか、総体的な運用能力を構築するものとして、各教科（領域）のバランスが適切であるか、が不明瞭である。d. 教科間の連携というのは、何も言語の諸領域間の連携だけではない。各階梯の修得レベルや難易度を明確にし、スムーズに、無理なく、成果を着実に積み重ねていける体制を構築することが望まれる。e. 当然のことながら、教えっぱなしでよいわけではなく、学

---

(2) 昨年7月に出された新学習指導要領の外国語編で示されている4技能5領域——「聞くこと listening」「読むこと reading」「話すこと（やり取り） spoken interaction」「話すこと（発表） spoken production」「書くこと writing」——は、2001年に欧州評議会が発表した『外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠 Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment』、略称CEFRの区分をそのまま踏襲したものである。文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編』  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073\\_09.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073_09.pdf)（2019/03/03 閲覧）

だが、2018年に欧州評議会が新たに出したCEFR補遺版では「listening comprehension」「reading comprehension」「spoken interaction」「written interaction」「spoken production」「written production」「mediation（媒介）」と領域が増えている。特に最後の「媒介」は通訳や翻訳も含め、さらにその枠を出る広い適応場面を持つ重要な領域（コミュニケーションモード）である。Council of Europe. Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment. Companion Volume with New descriptors:  
<https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989>（2019/03/03 閲覧）

習者の外国語運用能力の実態と階梯と修得能力とが比例して向上しているかどうかを、検証できる仕組みを設けることが必要である。

実際、外国語大学で外国語教育について議論する際に一番問題になるのが f. の問い、「外国語大学で修得すべき語学能力とは何か」への具体的な答えを見つけることである。この問いに対しては、教員の間でも、学生の間でもさまざまな意見や論点があり、おおよそ共有意識を持つことが困難なのが実情だ。教員間での話し合いや学生を対象にしたアンケート結果等を参考にすると、議論の中で目立つのは、理論重視 VS 実践重視、アカデミック重視 VS コミュニカティブ重視、の類の二項対立構造であり、教員は前者を、学生は後者を偏重する傾向が多少見られるようである。その一方で、十分な程度の実践能力の担保を重視する教員も、将来の研究者として学術的に高度なレベルでの言語知識を修得したいと希望する学生も、一定割合いる。f. の問題は、直接的にも間接的にも g. の問題、すなわち、専攻語学と学術的専門領域の連携の問題につながる。先に本学のカリキュラムについて紹介した通り、学生は高年次より専攻語学の垣根を越えて、各々関心のある学問領域を選ぶ。その一方で専攻語学の学習も継続するため、学問領域によっては専攻語学の授業内容と自身の関心が大きく乖離し、場合によっては語学学習のモチベーションが下がってしまうことがある。外国語の教員は語文関係の専門家が多く、授業に人文系の題材を用いることが少なくない。学生の学問領域が「語学文学コース」であれば、専攻語学と学問的関心のギャップは比較的小さく、学習者は両者の有機的なつながりを自ら意識し相互にプラスに働くであろうが、例えば、「法経商コース」に所属する学生にとっては、そのギャップは大きく学習の動機づけに影響を及ぼしている可能性がある。もっとも、学生の学問的関心が異なって多様であることを前提に、教員は一般的で学術的にニュートラルな題材を用いる場合もある。これはこれで、専攻語学と学問領域の有機的関係性を積極的に構築させる力は誰に対しても発揮できないということになる。解決法としては、学問的関心に沿った授業を複数揃えたり、題材は何であれ、学術的な学びに共通して必要となるアカデミック・スキルの修得を意識した内容にしたりするなどといった意見が出ている。

### 3. 語学教育改革で取り組む課題

さて、前節では、本学の外国語教育の中でどのような課題が指摘されてきたのかを紹介した。このような背景のもと、昨年、「語学教育改革 WG」が立ち上がる。これは、直接的には第3期中期計画で掲げられた目標「高次元のコミュニケーション能力の養成」を今後実現していくためのロードマップを作成する準備部隊という位置づけで設けられたものである。当該の目標には大きく二つの柱がある。第一の柱は、さらなる（１）語学教育の充実を図る、というもので、具体的には、学修成果を可視化することを目的として、専攻語学と兼修語学のカリキュラム改革を行うものだ。第二の柱は、（２）語学教育と専門教育の融合である。これは外国語大学として十分に時間をかけた語学教育が可能であるからこそ実現できるもので、グローバルな視野、世界の多様性への理解、幅広い情報への確かなアクセス力等、本学の強

味を活かす形で専門教育の深化を促すものである。

具体的にどのような案や意見が出ているのかについて簡単に述べる。まず、学修成果を可視化するためには、語学教育の観点から各階梯および各教科における到達目標を分かりやすく具体的に明示化する必要があること、その際は言語（学科）の差異を超えた一貫性を持つこと、そのために通言語的な国際基準になった（と言ってもいいだろう）「外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠 Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment」（略称 CEFR、本稿でも以降略称を用いる）に準拠することが望ましい。さらに、語学教育と専門教育との融合を促進する観点から、現在の教育ガイドラインを再検討し整備すること。そこには授業内容を的確に表す科目名にするためのリ・ラベリングという提案もある。外国語学習は知識と運用能力を習得し定着させるのに、膨大な時間がかかる。また、クラスサイズの大きさに不満が出ていることは先述の通りである。したがって、自律学習についても積極的に奨励し、ICT、E-learning、AI といった技術の活用も検討すべきである。その他、それぞれの学修に掲げた到達目標が確実に達成できる教育プログラムであるか否かを絶えず点検し、内部質保証の体制を整え、保証の精度を高めること。本学が設定している語学教育の質が着実に確保されていることを客観的に、学習者に対しても、社会に対しても保証する仕組みとして、CEFR を活用すること、また在学期間全体を通して学修成果の積み重ねが明確になるように、E-ポートフォリオのようなものが実装できればよい。特に外国語の習得は個人差が出やすいものであるが、各学習者の学習効果を出来るだけ高めるために、習熟度に配慮した授業を検討し学習環境を整える。

以上が、語学教育 WG の席で本学の語学教育における問題点を掘り起こしながら出てきた案や意見である。実現可能性が高いものから、実現するには慎重な議論を有するものまで、その性格はさまざまである。どのような優先順位で各課題に取り掛かっていくかは、また別の話しになるが、ひとまず語学教育をめぐる本学で議論中の課題を紹介する前半部分は終えることにする。次節以降では、学修成果の可視化にとって有効な尺度となり得るだろう CEFR について、どのように利用できるのか、利用するに当たっての問題点に限定して議論する。

#### 4. 学修成果の可視化と CEFR の「利用」

学修成果を可視化し、また教育の質を保証する手段として、CEFR に則った外国語外部試験を利用する場合、少なくとも事前に解決すべき以下のような問題がある。

第一に、語学教育の各段階の目標値として、どの基準値（レベル）が妥当であるかを検討しなければならない。それには、本学の学生が在学期間の異なる段階においてどの程度の語学レベルに到達しているのか、の現状把握が必要になる。現時点では、外部試験の受験はあくまで学生の課外での個別活動という位置づけであり、大学はその実態を把握できていない。

第二に、外部試験の受験をサポートする支援・奨励制度の構築の問題。CEFRをどのように利用するのかについては、さまざまな議論があるであろうが、学修成果の質を社会に対し

て客観的に保証するには、外部試験の受験を強制あるいは強く奨励することになる。だが、外部試験の受験には少なくない費用が発生し、本学のような公立大学に通う学生にとっては負担が大きい。現状では、例えば、TOEICの受験率は年次が上がる毎に増加し、4年次では8割の学生が受験を経験する<sup>(3)</sup>。これは、無論、就職活動の際に資格が有利に働くことを念頭においてのことである。したがって、大学ではキャリアサポートの観点から、現在でも英語の外部試験に対しては受験料1回分を補助する制度を設けている他、成績優秀者を表彰することもしている。このような観点の支援であるので、英語以外の他言語には制度の適用が無い。この事実そのものが、社会生活における有利な言語と不利な言語——学生風に言えば、「ツカエル」言語と「ツカエナイ」言語——といった言語格差を無自覚にも反映していると言えるであろう。結果として、英語以外の言語については外部試験の受験を積極的に奨励する動機づけがないのが現状である。

第三に、外部試験の利用より前に本学における語学教育カリキュラムの見直しが必要である。現時点のカリキュラムやコースシラバスはCEFRの指標を参照し、対応させているわけではない。したがって、学習者はカリキュラムやシラバスを参考にして自身の語学力レベルを評価することも困難であり、また目指すべき到達度の指針も持ち合わせていない。早い話、現状のまま外部試験の受験を奨励したところで、たとえ授業をしっかりと受けていたとしても、目標レベルに必ず到達するとは言えないのである。これは教育の質保証に大きく関わる。

上記した問題点は、ロシア語に限らず、他の専攻言語も抱える共通のものであるが、次節では、CEFRに準拠したロシア語を対象とする外部試験、「外国人のためのロシア語能力検定試験 Типовые тесты по русскому языку как иностранному」（略称ТРКИ、本稿でも以降略称を用いる）の本学での利用可能性に限定して検討する。

## 5. ТРКИの「利用」に立ちはだかる壁

大学の語学教育カリキュラムに明確に位置づける形でТРКИを利用しているのが大阪大学外国語学部ロシア語専攻である。大阪大学（旧大阪外国語大学）は、2000年度よりТРКИに準拠した形でロシア語専攻の1-2年次のコースデザインを構築し、独自の総合試験を実施し、データと経験を積み重ねてきた。2012年度からはТРКИの正規試験が導入され、現在に到る。その間の詳細は林田他（2010）、林田（2010, 2012）に詳しい<sup>(4)</sup>。学修成果可視化、CEFRの語

(3) 神戸市外国語大学・大学データ集「語学運用能力の成長」

[http://www.kobe-cufs.ac.jp/about/files/daigakudata2018\\_2\\_7.pdf](http://www.kobe-cufs.ac.jp/about/files/daigakudata2018_2_7.pdf)（2019/03/03 閲覧）

(4) 林田理恵、堀江新二、上原順一、藤原克美、マルガリータ・カザケーヴィチ（2010）『到達度評価制度構築のための『国際基準』に準拠したロシア語総合試験開発』科学研究費補助金（2008-2009）研究成果報告書、大阪大学；林田理恵（2010）「ロシア語総合試験結果データとその分析——2年次2000-2009年度——」『到達度評価制度構築のための『国際基準』に準拠したロシア語総合試験開発』科学研究費補助金（2008-2009）研究成果報告書、大阪大学、55-79；林田理恵（2012）「専攻課程へのТРКИ 正規導入と高大連携への展望（大阪大学）」『大学間、高等学校—大学間ロシア語教育ネットワークの確立』科学研究費補助金（2011-2015）2011年度研究成果報告書、大阪大学、75-81。

学教育分野での普及、入試における外部試験活用といった全体的な運氣の中で、遅ればせながらもTRKI他外国語外部試験の活用について検討の時機到来といった本学にとって、革新的な先駆者である大阪大学外国語学部ロシア語専攻はモデルケースであり、これまでの試みと成果から学ぶところは非常に大きい。「他人の輝で相撲を取る」ことにはなってしまうが、その成果は大いに利用させてもらいながら、本学ならではの論点を見過ごすことなく検討を進める必要がある<sup>(5)</sup>。

さて、本学における TRKI 利用を検討する際に最初に明確にしておかなければならない、最も本質的で現実的な問題は本学ロシア学科の学生の語学力の詳細な把握と到達目標レベルの設定である。TRKI 利用にあたっては、そのいずれのレベルをいつの時点での到達目標として採用するのか、は慎重に設定しなければならない。例えば、大阪大学のように専攻課程の初年次（1-2 年次）に用いるのか、あるいは、卒業までに到達すべき目標として利用するのか、という異なる基準点がある。大阪大学では 1 年次終了時に A2、2 年次終了時には B1 に到達していることを目標に設定しているが、これは 2000 年度から 10 年以上かけて、TRKI 基準に準じた独自試験のデータを積み重ね、レベル設定の妥当性を検証してきた結果である。そのようなデータの蓄積が無い中、本学のロシア語専攻生の各年次における語学力が、「CEFR/TRKI 基準に照らして」どのレベルに位置し（どの言語技能領域がどのレベルにあるのかも含む）、そこからどのレベルを到達目標とするのが妥当なのかを知るための具体的な方法は、早急に検討すべきであり、またそれで得られた結果はそのまま学修成果の可視化を検討するための基礎データとなるであろう。

では、もう一つの基準点、卒業時までに到達すべき目標の設定にTRKIを利用するとしたら、どのようなレベルが相応しいのであろうか。3 年毎に実施される学生生活調査（調査月は 11 月）では 3-4 年次生における語学運用能力を問うている<sup>(6)</sup>。だが、最新の 2016 年実施のデータでは、アンケートの回収率が全体の 5 割程度に過ぎないので、これで全体像はつかめない。さらに当該の問いへの未回答率も 8 割強あるということは、回答者の語学力レベルも全体を反映するものではないことは無論、重要なのは、ロシア語の外部試験をそもそも受験していないということである。いずれにせよ回答結果は、3 年生ではTRKIの第 2 レベル/B2（1 名）、ロシア語能力検定の 2 級（2 名）、3 級（1 名）、4 年生ではTRKIの第 2 レベル/B2（1 名）、第 1 レベル/B1（3 名）、ロシア語能力検定の 2 級（1 名）、3 級（1 名）であった。TRKI 受験に関しては恐らく留学中に現地で取ったものだと考えられる。また、学生生活調査には反映されていないが、留学レポートや留学先での履修科目等を見る限り、ロシア語圏への留学中にTRKI対策用の授業を受け、また現地で受験する学生は多い印象がある。その際もB2の受験が多く、まれにC1 という話を聞く。留学率が最も高いのは 3 年次の学生である。仮に、

---

(5) 参照：坪田清（2012）「日本の大学言語教育における CEFR の受容——現状・課題・展望——」『EU および日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究』科学研究費補助金基盤研究 B 研究プロジェクト報告書，93-103。

[http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/EU\\_kaken/\\_userdata/haida2.pdf](http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/EU_kaken/_userdata/haida2.pdf)（2019/03/03 閲覧）

(6) 神戸市外国語大学・大学データ集「語学運用能力の成長」：

[http://www.kobe-cufs.ac.jp/about/files/daigakudata2018\\_2\\_7.pdf](http://www.kobe-cufs.ac.jp/about/files/daigakudata2018_2_7.pdf)（2019/03/03 閲覧）

B2 レベルを卒業時までの語学力の到達目標とするのであれば、B2 というのは、ロシア語の一般的知識の他に、専門分野の議論を可能にするロシア語能力があることを認めるものである<sup>(7)</sup>。すなわち、B2 レベル到達は学習者が専攻語学と学問領域とを有機的に関連づけられるレベルにあることを保証する。

だが、現時点で早計な判断は慎むべきであろう。前述のように在学生の語学力を明らかにすることが先決である。並行して、現行の語学教育カリキュラムの中で各科目の到達目標や授業内容が、CEFR/ТРКИ の枠組み、具体的には各レベルで設定されている課題遂行能力をどの程度満たすものであるか探ることも必要になってくるのは言うまでもない。また、最新の CEFR 補遺版によってこれまでの参照枠に大幅な変更がもたらされた。言語能力を評価する新たな領域も加えられ（「媒介 mediation」）、参照レベルも細分化された。今後の CEFR の議論は、この CEFR 補遺版が中心になっていくであろう。

第4節でも触れたが、どの外部試験であっても受験にはコストがかかる。そして現時点で本学での支援制度は英語の試験に限られている。ロシア語の場合、ТРКИ を国内で受験しようとする、試験開催地が東京の日本対外文化協会しかないため、上京する必要がある。例えば、本学の学生が ТРКИ の B2 の受験を望んだならば、受験料 24000 円その他、夜行バスの往復というハードスケジュールを仮定すると 3 万円は確実に越える計算だ。ロシア語能力検定の 2 級が受験料 7 千円で近場の大阪で受験できることと比較しても、ТРКИ の国内受験は学生にとって経済的な負担が大きいのは確かだ。大学が、就職活動との関連ではなく、まさに語学教育カリキュラムとの関連で外部試験の活用あるいは受験の推奨を進めるのであれば、費用面での補助制度はより重要度が増し、必要なものになる。とはいえ、単に制度が受験を奨励するだけの位置づけであれば、たとえ補助制度が現在の英語並みかそれ以上に整ったとしても、受験する学生が増えるかどうかは疑問である。なぜなら現在でも比較的受験しやすいロシア語能力検定でさえ、受験する学生が少ないのであるから。したがって、補助制度を設けるだけでは不十分であり、おそらく受験数が大幅に増加するとは考えられない。

より重要なのは、ТРКИを受験する動機づけを高めることである。大阪大学のように各年次の到達目標として設定したТРКИのレベルを単位認定基準としてカリキュラムに組み込むのであれば、その受験は必須になるが、それには教育する側も授業の内容と質に対する大きな責任が伴う。大阪大学では試験結果のデータ分析を重ね、各年次の到達目標の達成に向けて教科書の変更やコースデザインの改善を重ねてきた<sup>(8)</sup>。本学においてそのようなハードな「大構造改革」の実現可能性は未知数だ。一方で、ロシア語の外部試験受験の動機づけを高めるためのソフトで地道な、しかしこれも確実に必要なのは、学生に社会におけるロシア語の有用性を伝えることである。そのためには、ロシア語教育関係者が積極的に社会の中のロ

---

(7) 民族友好大学国際テストセンター：  
<http://www.testtrf.ru/index.php/trki-sertifikatsionnye-urovni/trki-2>; Council of Europe, CEFR Global scale – Table 1 (CEFR 3.3): Common Reference levels:  
<https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages/table-1-cefr-3.3-common-reference-levels-global-scale> (2019/03/03 閲覧)

(8) 林田理恵 (2012) 「専攻課程への ТРКИ 正規導入…」, 77.



シア語の有用性を発見し、開拓し、情報を共有し、学習者に伝えていく努力をすることが求められるであろう。ロシア語の社会的な活用場面としては、医療や観光分野でのインバウンド需要、多言語多文化社会におけるコミュニティ通訳などが考えられる。

## 6. さいごに

これまで述べてきたように、本学は少なくない課題と向き合いながら、語学教育改革へのロードマップをこれから具体的に作成していくことになる。CEFR の補遺版が昨年発表されるなど、欧州の CEFR も実は完成されたものではなく、まして、語学教育の「国際スタンダード」のように位置づけられてはいるが、その本質は「参照枠、レファレンス」であり、各国、各言語の事情に合わせた利用が本来意図されていたところである。CEFR の日本での「文脈化」の議論が昨今盛んであるが、本学での CEFR の文脈化を探ることも必要になっていくかもしれない。さらに、CEFR に準拠する外国語の外部試験も——TPKI もそのひとつであるが——今後修正を迫られることになるのだろう。いずれにせよ、TPKI の国内での受験環境が改善され、受験しやすくなることは学習者にとっては有難く、その可能性は引き続き模索していきたい。

CEFR を生んだ欧州のように、異なる言語や文化を背景にする人びとの人的移動の加速とそのような人々がひとつのコミュニティに生きる中での相互理解・相互協力の必然は、もはや他国のことではなく、日本が直面する現実である。政府が外国人労働者の受入拡大に本格的に舵を取った今、これまでのように英語を知っているだけではコミュニティの多様性に対応できない場面が増えるであろう。「外国語が出来る」と言えば、「英語が出来る」という短絡的な、だが世間に広く知れ渡った、外国語観が、人それぞれ「どんな外国語が出来る」のか、という公平な見方に変わることは、多様な言語背景・文化背景を持つ人々と公平に接することに繋がる。そうやって言語や文化の違いを互いに認め合い、尊重し、協働できる複言語複文化社会を目指す、そのような理念が CEFR の根底にはある。国内では CEFR における言語能力評価基準の部分だけが大々的に利用されており、その理念の重要さが見過ごされている。TPKI も含め、語学教育に外部試験の利用を議論する際には、通言語的な尺度を提供する CEFR の理念についても考え、何のための語学教育か、という根本に立ち返る必要がある。



Kobe City University of Foreign Studies

神戸市外国語大学

7 февраля, 2019

## Преподавание иностранных языков в профильных ВУЗ-ах: задачи и перспективы реформы

神戸市外国語大学 金子百合子

КАНЭКО Юрико, доцент кафедры русского языка  
Университета иностранных языков г. Кобе



1



Kobe City University of Foreign Studies

0. Предпосылки реформы преподавания ИЯ

1. Формирование рабочей группы реформы  
преподавания ИЯ

2. Задачи реформы

3. Прозрачность приобретенных навыков и  
«применение» международных стандартов

4. Проблемы внедрения внешних тестов по русскому  
языку (ТРКИ)

2



神戸市外国語大学

## 0. Предпосылки реформы преподавания ИЯ



3

## Справка : Учебный план университета

1年生・2年生

3年生・4年生

英米学科  
ロシア学科  
中国学科  
イスパニア学科

学科専攻語学

兼修語学

学科基礎科目

全学共通科目

語学文学コース  
法経商コース  
総合文化コース  
国際コミュニケーションコース

ゼミナール

### Специальность «Русский язык». Учебный план.

время  
(45min.)

|     |                                              |                                      |                        |           |      |
|-----|----------------------------------------------|--------------------------------------|------------------------|-----------|------|
| I   | Основы грамматики (4 предмета)               |                                      | Говорение (2 предмета) |           | 360  |
| II  | Грамматика (увеличение лексики и применения) | Чтение. Начальный уровень [2п.]      | Говорение [2п.]        |           | 360  |
| III | Чтение (Новости) [2 п.]                      | Чтение (литература + культура) [2п.] | Письмо                 | Говорение | 240  |
| IV  | Чтение (литература + культура) [3п.]         | Говорение                            | 4                      |           | 1320 |

#### Выявленные проблемы

ИЯ как специальность. Группы более 40 чел. «Говорение», «Письмо» - 20 чел. Следовательно недостаток практической работы

За исключением I, уровень, содержание урока и выбор учебника на усмотрение преподавателя.

При оценке общего уровня владения языком нет способа выявления роли отдельного предмета (4 компетенции, 5 сфер) и предметной сбалансированности.

Имеется ли соответствующая преемственность между уровнями предметов (соответствие степени сложности)

Отсутствует система оценки повышения уровня владения языком при переходе на следующий курс

Как у преподавательского состава, так и у студентов отсутствует понимание того, какого минимального уровня владения языком должен достичь студент специализированного вуза. Противостояние «теории» и «практик», «академичности» и «коммуникативной». (Преподаватели склонны переоценивать первое, студенты – второе)

Отсутствует механизм преемственности теоретического профильного и языкового материала. Большинство преподавателей – филологи и культурологи, соответственно содержание урока уходит в эту тематику.

5



神戸市外国語大学

## 1. Формирование рабочей группы реформы преподавания ИЯ



6

## Воспитание компетенции многомерной коммуникации

### 1. Содержательность языкового образования

- Реформировать учебный план по языковой специальности и по 2-му ИЯ, поставив целью прозрачность оценки достижений учащихся.

### 2. Интеграция языкового и профессионального образования

- Введение в языковое образование элементов профессионального

7



## 2. Задачи реформы преподавания ИЯ



8

### 1. Четкая постановка задач

- Четкая постановка целей для каждого курса и урока, унификация языкового стандарта (для разных языков), связь с международным стандартом (CEFR)

### 2. Образовательный стандарт

- Связь с профессиональным образованием, внеклассная работа (ICT, e-learning, AI), уточнение и определение содержания при помощи релейбинга

### 3. Гарантии качества

- Международный языковой стандарт (CEFR), Е-портфолио

### 4. Контроль степени усвоения материала

- Тестирование на определение уровня знаний, контроль достоинств и недостатков работы класса в связи со степенью усвоения

9



### 3. Прозрачность приобретенных навыков и «применение» международных стандартов



10

#### Использование международных стандартов (внешних тестов): настоящее положение и проблемы

##### 1. Охват уровня владения ИЯ

- Внешние тестирования относятся к сфере частной жизни студентов. Университет эту информацию не охватывает (см. проводимое раз в 3 года анкетирование о жизни студентов)

##### 2. Система поддержки и поощрений

- (i) Возмещение оплаты за внешние тестирования и нады предусмотрены только для тестирования по английскому языку
- (ii) Нет системы поощрения и мотивирования студента к сдаче внешнего экзамена по любому другому языку кроме английского

##### 3. Учебный план языкового образования

- Действующий учебный план по ИЯ не ориентирован на цели CEFR. Следовательно, основываясь на УП, студенту сложно оценить свой уровень знания языка и построить стратегию последовательного достижения компетенции

11



### 4. Проблемы внедрения внешних тестов по русскому языку (ТРКИ)



12

## (1) Охват уровня владения ИЯ



Источники: 1. 2013, ноябрь. Первое анкетирование «Жизнь студента», 2. 2016, ноябрь. Второе анкетирование «Жизнь студента»

### Тест на уровень владения русским языком

|        | 1уровень | 2уровень | 3уровень |
|--------|----------|----------|----------|
| 2016г. |          | 3        | 2        |
| 2013г. | 2        | 4        | 4        |
| всего  | 2        | 7        | 6        |

### Тест по русскому языку как иностранному (ТРКИ)

|        | ТРКИ_3 (C1) | ТРКИ_2 (B2) | ТРКИ_1 (B1) | ТБУ (A2) |
|--------|-------------|-------------|-------------|----------|
| 2016г. |             | 2           | 3           |          |
| 2013г. | 1           | 4           | 6           | 1        |
| всего  | 1           | 6           | 9           | 1        |

Многие студенты во время языковой стажировки посещают занятия по подготовке к тестированию. В основном сдают ТРКИ\_2. (B2). Изредка ТРКИ\_3 (C1)

<http://www.kobe-cufs.ac.jp/about/daigakudata2017.pdf> 14

Из анкетирования о жизни студентов, проведенного в ноябре 2013г. (внутренние материалы)

### Настоящая ситуация по языковым стажировкам



## Центры языковой стажировки студентов кафедры русского языка

### Есть соглашение

- МГУ (1967~); У-т им. Пушкина (2001~); Кубанский у-т[обмен] (2015~); Уральский у-т[обмен] (2015~); Тихоокеанский государственный у-т[обмен] (2016~)
- Казахский у-т[обмен] (2018~)

### Прочее

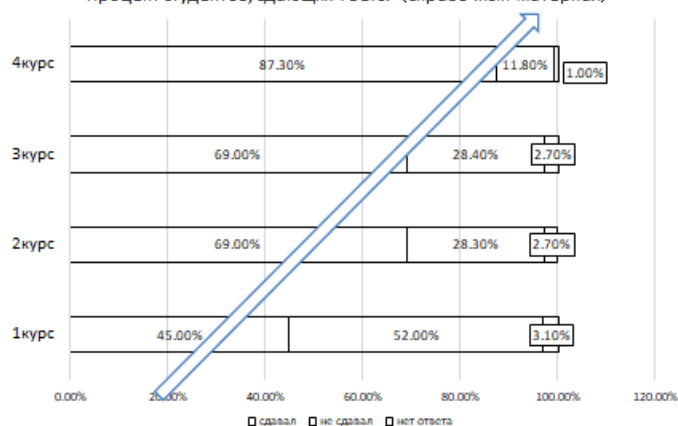
- Московский государственный институт международных отношений, ННГУ им. Н.И. Лобачевского ДВГУ (ДВФУ)
- Белорусский у-т, Минский государственный лингвистический у-т

16



Из анкетирования о жизни студентов,  
проведенного в ноябре 2016 г.  
процент ответивших 65.6% (n=1236)

Процент студентов, сдающих TOEIC. (справочный материал)



17



## (2) Система поддержки и поощрений



18

#### Большие затраты на сдачу экзамена

- Около 57,000иен! (Из них: оплата за экзамен B2 = 24,000円 + Билет на поезд синкансен в обе стороны с учетом студенческой скидки + оплата за гостиницу, 1 ночь)
- Для сравнения. Тест на уровень владения русским языком (кентей). Сдать на 2-й уровень стоит 7000иен, экзамен в Осака проводится

#### Мотивация к введению системы поддержки и поощрений

- В случае с английским языком мотивировка – карьера (при устройстве на работу). Сертификат признается в обществе, много шансов сдать экзамен, большое количество сдающих, прозрачность критерия получения высокого балла.
- Общественное признание владения другими языками, степень их применимости, возможно, поднимется, если активно разрабатывать области их использования в обществе (перевод для иностранцев, нужды приезжих, например, туристов)

19



## (3) Учебный план по ИЯ (4) Поддержка самостоятельной внеаудиторной работы



20

#### (3) Учебный план по ИЯ

- Если поставить уровень B2 (ТРКИ\_2) как критерий «компетенции многоуровневой коммуникации» целью обучения, то можно ожидать интеграцию языкового и профессионального образования, получение не только базовых, но и специальных знаний по русскому языку.
- Для этого требуется определить, насколько сегодняшний учебный план охватывает требования B2 и «надеть» на сегодняшние предметы рамки ТРКИ. То есть мы изучаем, как создать преемственность между университетским УП и внешним экзаменом, а не подстраивать УП под внешний экзамен.

#### (4) Поддержка самостоятельной внеаудиторной работы

- То, что не охвачено УП, студентам придется осваивать самостоятельно, и здесь необходима поддержка, такая как система e-learning, ICT. Это также необходимо для восполнения нехватки индивидуальной практики в условиях больших языковых групп.

21



Средний балл TOEIC (по курсам)

